

熊本学園大学 外国語学部 第16号

英米学科 GAZETTE

令和元年11月
発行・編集
熊本学園大学 外国語学部

巻頭言

吉田 良夫 (教授・副学長 / イギリス文学)

2021年からセンター入試が大幅に変わる。色々な変更点があるが、英語に限って言えば、外部試験の導入である。センター試験の英語にかわって、民間の業者が行っているTOEICや英検やGTECなどを受験してもらい、それを活用するというものである。

これらの外部試験の活用については、地域や家庭の経済力の差が結果と直結していることや、異なるテストの結果を比較することの不公平さなど、さまざまな問題点が指摘されてき

た。激震が走ったのは、早々と7月にTOEICが参加を取りやめたことである。英検は六千円の予約金を取るが、受験しない場合には返金しないという方針に対して不満が出ている。GTECも来年の試験会場の確保などに苦慮している。

本学では、英語の外部試験を受験の条件にはせず、加算方式で対応することとした。本学を希望する生徒のみなさんには安心して受験してもらえと思う。

(結局、文科省は11月1日に英語の民間試験の導入の延期を発表した。)

ゼミ・研究紹介

林 日出男 (教授 / 外国語習得論・英語教育)

私のゼミでの主テーマは、「外国語習得論 (Second Language Acquisition)」というものです。簡単な表現をすれば「人が外国語を習得するときのメカニズムの研究」ということになります。例えば、母国語の影響はどのように出るか、文法学習は必要か不要か、現地へ行かないと習得できないか、年齢はどのように習得に影響するか、動機づけの影響はどうか、男女どちらが優位か、どのような学習方略が有効か、などを扱います。学生はこれまで漫然と英語に接してきたわけではなく、何らかの信条をもって、それを反映させて英語学習をしてきてはいますが、間違った認識が多いのもこの分野の特徴です。例えば「英語 (外国語) は早く始めないと習得できない」というのも、単純には言い切れないものがあります。現地で子供が1年間で英語をマスターしたことを根拠に、国内での英語学習も早くから始めなければいけな

いと結論していいかなど、大変微妙です。ある意味では、このゼミは誤認識との闘いです。

かつてこの外国語習得論 (英語習得論、英語教育) は「英語学」の下位分野として位置づけられていましたが、1970年代以降、急速に研究者人口が増え、今では英語学とは異なる独立した分野を形成しています。特に近年は心理学との融合が進み、心理学で培われた知見や研究手法がこの分野に適用されています。英語分野を専門にしてきた研究者にとって心理学は門外の世界であり、その点の苦悩があります。私の専門は「外国語習得の動機づけ」ですが、「動機づけ」は心理学で長い歴史のある研究分野であり、それを扱うことはまさに心理学そのものに踏み込むこと意味します。一方で、心理学者のまだ知らない動機づけの世界が外国語の世界にはあるという捨てがたいプライドも、この分野の研究者にはあります。近年、この種の独自性が薄れてかけているのが気がかりです。心理学との融合の模索が続きます。

講演会のお知らせ

外国語学部では、講師として笠原 究先生 (北海道教育大学教育学部教授) をお招きし、「**高等学校の英語教育グローバル化に対する対策**」に関するテーマで講演会を開催します。笠原先生はGazette15号でご紹介した『英語で教える英語の授業』(望月正道他, 2016, 大修館)の著者の一人であり、今回もそれに関連した内容 "Conducting English Lessons in English: For Fun and Achievement" でお話しいただきます。参加ご希望の方は塩入までお名前・勤務校をご記入の上、メール

でご一報ください。場所などの詳細をお知らせいたします。当日参加も可能です。

講師：笠原 究 (かさはら きわむ) 先生

日時：12月7日 (土) 14:00 開始予定

場所：熊本学園大学

(教室未定 / 決まり次第参加予定の方にご連絡)

塩入 すみ shioiri@kumagaku.ac.jp

書籍紹介

三好行雄編『漱石文明論集』、岩波文庫

赤井 恵子（教授 / 日本近代文学）

夏目漱石は自身の仕事の第一義を〈小説を書くこと〉に定めていた。したがって、小説以外の著述はそう多くない。二十八巻本全集にして一、二巻程度である。その少ない評論類から、文明論つまり日本の近代化に関する文章（講演を含む）を抜き出して編まれたのが、この文庫本である。さらに随筆・日記・書簡などからも、同趣の言及を含む文章が抽出され収録されている。この本を読む読者は、まずは口語体の読みやすい講演に目を通すことになる。文語文の評論の中でも難解で読みにくい、熊本時代のエッセイ「人生」は、かなり後半にある。よく考えられた配列である。

日本の近代化のあり方を漱石は「外発的」と述べた。「外からおっかぶさった他の力でやむをえず一種の形式を取る」——「他の力」とは西洋文明の衝撃を指す。そしてさらに、そのような外発的な近代化が個人に与える心理的影響にも言及している（「現代日本の開化」）。いやそもそも文明の発展それ自体が人間の「生存の苦痛」をやわらげるものではないことを、漱石は「外発的」というキーワードを出す前に述べている。つまり、日本人の苦痛は、文明の発展そのものがもたらす苦痛と、外発的な近代化がもたらす苦痛とが、二つ重なったものである、ということになる。この漱石の言及は、今でも有効なのではないか。私が授業で使用しているテキストのうちの一冊を、ここに紹介した。

英米学科NEWS

日本語教育実習

～オールブラックスに日本語指導アシスタント～

今年8月8日から4週間ニュージーランドのクライストチャーチ工科大学に日本語教育の実習（※）に訪れていた姫野晴加さん（英米学科3年）が、「オールブラックス」の愛称で知られるニュージーランド代表の活動拠点地の一つ、カンタベリーの練習場を訪れ、チームメンバー・関係者に日本語を教えるアシスタントを経験しました。英語を使って日本でのマナーや日本語の挨拶・フレーズをレク



チャーし、個別の質問にも答えるなど交流を深めました。写真は、現地でメンバーと一緒に撮影した一枚。姫野さんは有名な民族舞踊「ハカ」でも使われるマオリ語を教えてもらったり、ラグビーボールの投げ方を体験。「ニュージーランドのチームの皆さんはとても気さくで、楽しく貴重な時間でした」と話します。

※日本語教育の実習

本学には日本語を母語としない人に日本語を教える「日本語教員」の養成課程があります。実習では、韓国・台湾・ニュージーランドをはじめ国内外5カ所で約2週間から4週間かけて研修を行い、卒業生は国内外の教育機関で活躍しています。

全国吟詠コンクール優勝

英米学科一年 田尻 諒一さん

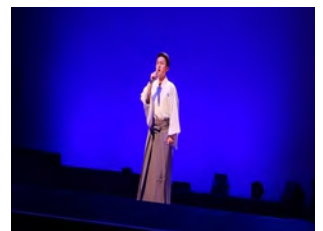
9月16日に東京で行われた全国吟詠コンクールで、英米学科一年の田尻諒一さんが優勝しました。本人より優勝の感想、日本の伝統文化を海外に伝えることへの抱負を聞きました。

「私は家族が詩吟を教えていたため、生まれた時から詩吟を聞いていました。そんな環境だったので、私は詩吟に出会うことができました。しかし、今では詩吟をしている人はご年配の方が多く、若い人々への継承が中々難しい状況にあります。そこで今、私は詩吟という日本の伝統文化を広めるために全国で詩吟を広

める活動をしています。また、去年と一昨年の二年連続で夏にアメリカのシカゴで公演をさせていただきました。私だけでなく、私の同年代の青年が詩吟を広めるために頑張っています。ぜひ聞く機会があれば足をお運び下さい。日本の古き良きものに触れる良い機会だと思います。」



活動風景



全国大会での舞台



きみと未来をつなげる

クマガク

編集人 塩入 すみ（英米学科長）

〒862-8680 熊本市中央区大江 2-5-1

TEL: 096-364-5161（代表） Mail: shioiri@kumagaku.ac.jp